様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １０ 日現在

機関番号：２５４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２００１

研究課題名（和文）現代パレスチナ文化の観点による平和構築論の再検討　パフォーミング・アートを中心に

研究課題名（英文）Reconsideration of Peacebuilding from the view of Palestinian culture: focusing on performing arts on the contemporary scene

研究代表者
田浪　亜央江（Tanami, Aoe）

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：７０７２５１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：土地や社会的よりどころを失ったパレスチナ人にとって文化はアイデンティティの表現手段であるとともに、占領や抑圧に対する抵抗手段である。他方で国際社会とりわけ援助機関からは「平和構築」の手段とみなされ、しばしば管理の対象となる。
本研究では、パレスチナ文化のもつこうした背反的な機能やジレンマをパレスチナ人自身がいかに自覚しつつ、自分たちの文化活動にどのように向き合っているのかを探った。そしてパレスチナ社会内部への問い返しや自己批判を行いつつ、こうした状況を皮肉や嘲笑の対象として新たな作品創造のモチーフとする文化表現のあり方を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
平和構築分野の伸張ぶりは近年著しいが、イスラエルによる占領の続くパレスチナは、紛争後に焦点を当てた平和構築のモデルにはなりにくい。他方で、文化活動を通じた紛争からのトラウマ克服や、パレスチナ・イスラエル間の文化交流など、文化がこの地の平和構築に貢献するとの言説は長年幅をきかせてきた。
本研究は地域研究の立場から、パレスチナの文化活動とりわけパフォーミングアートの担い手へのインタビューや作品のメッセージ読解を通じ、文化の役割に関する国際社会とパレスチナ側とのズレを浮かび上がらせている。対パレスチナ文化支援のあり方を問う異分野横断型の研究であるとともに、収集事例は政策提言のベースともなり得る。

研究成果の概要（英文）：For Palestinians having lost social and political power in addition to their land, culture is a tool for expressing their identity, as well as a means of resisting oppression and occupation. On the other hand, culture is regarded by the international community, especially aid organizations, as a tool for "peacebuilding" and is often the subject of management and control. This research explored how the Palestinians themselves are aware of such annoying functions and dilemmas of Palestinian culture and how they commit to their cultural activities. And we caught on though this research the way that they express the situation by mocking and make fun of it, thus lead to creation of new works, while reviewing inside their society and criticizing themselves.

研究分野：中東地域研究

キーワード：パレスチナ　パフォーミング・アート　平和構築　文化支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

報告者にとって本研究は、2010～2014 年度の文部科学省科学研究費 基盤研究（C)「現代パレスチナ文化の動態研究―生成と継承の現場から―」（研究代表者・山本薫）での調査に続く、パレスチナ文化をテーマとした研究課題である。今回の研究課題が先行のものと大きく異なるのは、「パレスチナ文化」のなかでも特にパフォーミングアートに焦点を当てたこと、そして「平和構築論の再検討」を研究目的としたことである。

住民のマジョリティティはムスリムであり、一般に肌や身体の線を見せることを忌避するとされる社会の中で、スポーツを含め身体を使ったアートが意外と盛んであること、それは委任統治期以来の「伝統」であるという気付きがパフォーミングアートに焦点をあてる出発点であった。また 2013 年頃、パレスチナ・パフォーミングアート・ネットワーク（PPAN）というプロジェクトがカッターン基金によって運営されているのを知ったが、パフォーミングアートに特化したネットワークはパレスチナで初めてのものだった。本研究課題進行中の 2018 年以降に PPAN は独立した団体となり、さらなる展開を開始した。報告者の関心の方向の先に、ちょうど時期を同じくしてこの団体の立ち上げと発展があり、変化の早い現代パレスチナ文化の動向を捉えるための参照軸となってくれたのは、報告者にとってはありがたいことだった。

平和構築 Peace Building とは、国際政治学や国際関係論において、1992 年にブトロス・ガリ国連事務総長が報告書『平和への課題』のなかで紛争解決の概念の一つとして提唱したことが最初だと説明されている。とりわけ 2000 年代以降、「平和構築」はアメリカによる「対テロ戦争」のなかで変質し、武力介入を含めた多国間プロジェクトの側面を強めている。文化を無前提に平和的なものと捉えるのではなく、「文化による平和構築」がそのなかで補完的な役割を果たしていることに対して留意する必要がある[1]。

「紛争後」の段階で起動することが多い「平和構築」は、パレスチナ／イスラエルとは本来的に相性が良くない。1948 年のナクバ（大災厄）以降、イスラエルによるパレスチナ人追放、占領の拡大、占領下での人権侵害が続くパレスチナの状況は、「紛争後」が展望できるような状況にないからである[2]。そうしたなか、「平和構築を支える文化の力」を説く論者によってパレスチナ／イスラエルにおける事例として挙げられているのは、サッカーを通じてイスラエルのユダヤ人とパレスチナ人の融和を促す二つの NGO[3]や、エドワード・サイードとダニエル・バレンボイムによって設立された「ウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団」といった、パレスチナ人とイスラエル人（ユダヤ人）が共に関わる活動である。しかし、現地の実情に立つならば、パレスチナ人とイスラエル人（ユダヤ人）が共同参加する文化活動は、事実上単発のものとして国外のプロジェクトが持ち込むものでしかなく、パレスチナ社会の中で持続的に取り組まれ発展している活動とは異質のものである[4]。

以上が研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

上記の通り、地域研究の立場でパレスチナ文化の調査を行ってきた報告者が専門外の平和構築論に「首を突っ込む」ことで目指したのは、文化を通した平和構築のあり方を描き出したり、文化が平和構築に役立つと論証することではない。むしろ「平和構築」と「文化」が無条件に結びつくとか、文化が平和構築に寄与するといったナイーブな言説を問い直すことに眼目がある。そのために、パレスチナ社会における「平和構築」に対する見方とパレスチナの外側におけるそ

れとの「ズレ」を、文化とりわけパフォーミングアートにおいて見出すことが本研究の目的であった。

３．研究の方法

上記の目的を念頭に、パレスチナ被占領地（ヨルダン川西岸地区）で活動を続ける文化団体を訪問し、同時にまたは別途、団体の代表者やスタッフ、俳優やダンサーにインタビューを開始した。対象団体や対象者は、主として以下のとおりである。

・パレスチナ・パフォーミングアート・ネットワーク（代表 ユースフ・ニザール氏）
・アシュタール劇場（代表／俳優 イマーン・アウン氏、俳優 エドワー・ムアッリム氏、俳優 ムハンマド・イード氏）
・ラサーイル劇団（代表／俳優 アドナーン・ボーバリー氏）
・ハカワーティー劇場（評議委員／俳優 カーミル・バーシャー氏）
・エル＝フフーン［ダブケ舞踊団体］（元ダンサー K 氏、H 氏、Y 氏）
・ウィシャーフ［ダブケ舞踊団体］（代表 ムハンマド・アター氏）
・ポピュラー・アート・センター（スタッフ シャラフ・ザイド氏）
・アル＝ハーラ劇場
・サナ―ベル劇場

当初、何をどこまで行えば本研究の目的を果たしたことになるのか、具体的な射程は必ずしも明確ではなかった。数多くのインタビューを行い、報告者の考えにそった言葉を引き出し、それを受け売りすれば十分だとも思えなかった。

インタビューを重ねるうちに、むしろ作品そのものを対象とすることに関心がシフトし、研究の目的からしても、そのほうが説得力をもつと感じるようになった。インタビューの中で引き出せる言葉は十分に練られたものではない場合もあり、偶然の要素に左右されることも多いが、発案から実演までのあいだに何度も練り直され試行錯誤を経て完成した作品は、繰り返し鑑賞され吟味されることに耐えうるし、個々の立場を越えたパレスチナ文化の担い手という、集団的な意思として解釈しうるからである。

パフォーミングアートの実演に居合わせるのは時間の制約もあり、機会は限られていたが、事後的に体験しうる記録（動画、音声、写真、新聞記事、ミュージアムでの展示）を収集することで補った。研究の後半は、こうした媒体の収集に多くが費やされた。

４．研究成果

(1)成果物

上記のインタビュー内容の一部は、成果報告冊子『パレスチナ文化の現在地　抵抗するパフォーミングアート』に収めた。また、アシュタール劇場が制作したフォーラム劇の一部（下記）については、セリフや観客による応答を上演記録動画から聴き起こし、報告者による解題を付して上記報告冊子に収めた。

・上演採録「ヤースミーンの家」　アシュタール劇場によるフォーラム劇
・「アブー･キーラ一家」（概要）アシュタール劇場のアウトリーチプログラム①
・「マフカマ（法廷）」（概要）同上②
・「ミルヤーウ・ワ・クルカーウ(去勢羊と鐘鈴)」（概要）同上③

上記報告冊子は関連分野の研究者や関係者に配布するほか、PDF ファイルのかたちで HP（https://azraq.web.fc2.com/kaken_top.html）に掲載した。

(2) 調査から得た知見

ここでは上記成果物の内容を一部要約しながら、研究を通して得た知見についてまとめる。現地でのインタビューにおいてはパフォーミングアートの担い手たちに、演劇やダブケ、コンテンポラリーダンスといったそれぞれのジャンルに対する見解やそれを行うようになった経緯や事情などとは別に、繰り返し「なぜパフォーミングアートなのか」という問いを向けた。「身体」という捉え方で考えてもらうと、自身の身体を用いること、パレスチナ人としてのアイデンティティ、そして〈抵抗〉が固く結びついていることが浮かび上がる。パレスチナ人を追放し、パレスチナ社会を脆弱化しできる限り縮小させようとするイスラエルの政策のなかでパレスチナの地に留まり続け、そこで声や身体を使ってパレスチナ社会を再現したり、自分の足取りやステップを重ね、身体の躍動を空間の中に描きこむ。それはパレスチナ人としてのアイデンティティを確認し、より強固にしてゆくことでもあると同時に、占領という外部からの力に対する〈抵抗〉を意味する。パフォーミン

グアートはこうしたメカニズムを、日常とは異なる芸術的な空間のなかに凝集しながら可視化させるのである。

ここでの〈抵抗〉は、圧倒的に「ムカーワマ المقاومة」という語で表現される。これは武装蜂起を含め、占領者・入植者との直接対峙のニュアンスとともに、占領下におけるさまざまな抵抗のかたちを含む。他方、パレスチナの外の世界で〈抵抗〉として広く知られる語に「スムード الصمود」があるが、これは 1967 年の六月戦争におけるアラブ側の大敗北以降のパレスチナ人の大衆的な戦術として広がったものであり、1978 年のアラブ諸国によるパレスチナ人支援のための「スムード基金」が発足したことで、いわば公的な認知を得たものだ[5]。

ムスリフ[6]によれば、スムードとは「一種の忍耐強さ、正義への積極的な取り組み、確固とした非暴力」、そして「公正に行動することによって不正に立ち向かうこと」を意味する。つまり占領者との直接の対峙というよりも、パレスチナ人自身の精神のありようとそれに基づく行動様式であり、自らが「自尊心を構築し、自分自身を受身の犠牲者ではなく、積極的な市民とみなす」とともに、そう出来るように他の人々とりわけ若者を教育するという、きわめて倫理的な価値観だとする。他方でムスリフは国際政治の分野で概念化された「平和構築」の用法を念頭におきながら、スムードが平和を構築するための重要な概念ツールであり、「抵抗と平和構築が関わりをもつことを確認し、現在のパレスチナの文脈で平和を構築する作業を理解する」ための拠りどころであると述べる。ただしムフリフが「スムード」に依拠する根拠に関する説明は、「パレスチナ文化におけるもっとも重要な概念」であること以上には見当たらない。パフォーミングアートの担い手たちによって異口同音のように口にされる語が文化を通じた抵抗・闘争＝〈ムカーワマ〉であることを思うと、すんなりと受け入れ難い議論である。

むろん口頭でのインタビューで用いられる語と吟味された概念のあいだには齟齬がありうるし、文脈によっては「ムカーワマ」と「スムード」は入れ替え可能であろう。だがここで注意を要するのは、「パレスチナ文化におけるもっとも重要な概念」であるスムードが「平和構築」に寄与するとされ、「スムード」と「平和構築」が一続きのものとして持ち出されていることである。この文脈において「ムカーワマ」が代替されることはあるまい。報告者が聞き取った限りでは、パレスチナの文化実践の精神と「平和構築」のあいだにつながりがあるとは見なせないのである。

平和構築（ビナーウッ＝サラーム بناء السلام）という、パレスチナ社会で決して一般的ではない概念は、「対テロ戦争」の一手段という説明を介して容易に理解される。「国際社会」から「テロリズム／テロリスト（イルハーブ إرهاب／イルハービー إرهابي）」と同一視されるという経験を繰り返してきたパレスチナ人たちが、これに対してひじょうに敏感に反応し反発を示すのは、ありふれた情景である。

「対テロ戦争」を遂行またはそれを支持する「国際社会」と、そこに属するドナーから援助を受けつつ活動を続けるパレスチナの文化団体との緊張関係をフォーラム劇のなかで示したのは、アシュタール劇場の「ヤースミーンの家」（2011）である。上演当時はアシュタール劇場の名前しか知らなかった報告者が本作にたどり着き、上演記録動画を入手するまでには多くの回り道があったが、丁寧に起こしてみると現在も継続中のホットな議論が劇場空間のなかで交わされていることが分かる。

本作の直接のモチーフは、「9・11」以降、「テロリスト協力団体」を排除するために USAID によって援助申請手続きが厳格化されたことである。人権活動家、パレスチナ自治政府当局者、保健衛生の外国人専門家、「革命的な」若者、など誇張され戯画化された登場人物のセ

リフからパレスチナと「国際関係」の緊張関係が描かれるだけでなく、パレスチナ社会内部の権威主義や援助依存体質、抗議活動やスローガンの硬直化などへの問いかけへと議論は広がってゆく。パレスチナの文化の担い手たちの批判精神と諧謔精神を汲み取り堪能することを通じ、「平和構築」に寄与するための「文化」という枠組みでは到底捉えきれない豊かで力強い文化実践の現場がパレスチナに存在し、展開し続けていることを力説したい。

---

[1] 福島安紀子『紛争と文化外交　平和構築を支える文化の力』(慶應義塾大学出版会、2012 年)、特に図 3「包括的平和構築のための文化活動の役割」(39 頁)。

[2] JICAは2000年頃より「平和構築支援」という新たな援助アプローチを導入し、パレスチナにおけるその取り組みを「信頼醸成」または「信頼関係構築」という用語で呼んでいるが、パレスチナの現地情勢、さらにイスラエルとの信頼関係構築が「パレスチナ社会全体の総意」とはなっていないことを理由に、JICAがパレスチナにおける「信頼醸成」に直接取り組んだ事例は見られないという。「パレスチナにおける信頼醸成・和解支援の課題と展望」『広島平和科学』28(2006) 63-80頁。

[3] イギリスのブライトン大学などによってイスラエル北部のガリラヤ地方で実施されている「フットボール・フォー・ピース」および「イスラエル、パレスチナ、日本の子どもたちの交流を通じて平和の文化を創造すること」［福島、前掲書、85 頁］を謳う日本の NGO「ピース・キッズ・サッカー（現ピース・フィールド・ジャパン)」が挙げられている。

[4] ただし、被占領下のパレスチナ人ではなくイスラエル国内に住むパレスチナ人（そのほとんどがイスラエル国籍保有者）とユダヤ人のあいだの共同の取り組みは、それなりに存在する。

[5] Shehadeh, Raja. *The Third Way: A Journal of Life in the West Bank.* Quartet Books.1982.

[6] Musleh, Abeer. 'Theatre, Resistance, and Peacebuilding in Palestine'. *Acting Together: Performance and the Creative Transformation of Conflict. Volume I: Resistance and Reconciliation in Regions of Violence.* New Village Press. 2011.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田浪亜央江	４．巻 46巻8号
２．論文標題 田浪亜央江モニュメント・証言・歴史　ナクバとヒロシマ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田浪亜央江	４．巻 1巻
２．論文標題 委任統治期パレスチナにおけるワタンの発見　　「ハリール・サカーキーニー日記」に見る〈旅〉	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中東現代文学論集	６．最初と最後の頁 226-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田浪亜央江	４．巻 14
２．論文標題 オスマン末期のパレスチナ人にとっての郷土／祖国――ハリール・サカーキーニーの日記を入り口に	５．発行年 2017年
３．雑誌名 アジア太平洋レビュー	６．最初と最後の頁 68-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田浪亜央江	４．巻 13
２．論文標題 イギリス委任統治下パレスチナ人の旅行記に見る〈郷土〉	５．発行年 2016年
３．雑誌名 アジア太平洋レビュー	６．最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田浪亜央江	4．巻 16
2．論文標題 パレスチナ社会における歓待のジレンマーオスマン末期を舞台としたテキストを手がかりに	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジア太平洋レビュー	6．最初と最後の頁 46-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34480/00000005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

1．著者名 広島市立大学国際学部〈際〉研究フォーラム 編	4．発行年 2017年
2．出版社 文眞堂	5．総ページ数 196
3．書名 広島市立大学国際学部叢書 8　〈際〉からの探究　―国際研究の多様性	

1．著者名 臼杵陽・鈴木啓之編著	4．発行年 2016年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 394
3．書名 パレスチナを知るための60章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・成果報告冊子『パレスチナ文化の現在地　抵抗するパフォーミングアート The Existing Location of Palestinian Culture: Performing Art to Resist』

・文部科学省科学研究費　基盤研究（C）中間報告
https://azraq.web.fc2.com/kaken_top.html
文部科学省科学研究費　基盤研究（C）中間報告
http://www.palestine-hiroshima.com/2017_kaken.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考